特集

新しい○○情報学

1. 農業情報学
2. 観光情報学
3. 災害情報学
4. フィールド情報学
5. 音楽情報学
6. 健康情報学
7. 人間情報学
8. エンタテインメント情報学

特集 新しい○○情報学

編集にあたって

塚本 昌彦
神戸大学

松原 仁
公立はこだて未来大学

情報学の従来の研究はハードウェア，システム，ソフトウェアを新しく作り出してそれらをあるアプリケーションに適用して作り出したものの有効性を証明するというかたちのものが多かった．その場合，アプリケーションは作ったものの有効性を示すのに向いているかどうかという観点から選択され，作ったものの有効性を示すための例題に過ぎない．一方でアプリケーションの観点から見ればそれは単なる例題ではなく，なんとかして解かなくてはいけない「対象」である．そもそもアプリケーションという言い方が偏っている．解かなくてはいけない「対象」こそが中心にあるべきであって，ハードウェア，システム，ソフトウェアはその対象を解くための「道具」に過ぎない．

この「道具」と「対象」の距離感をうまくとらえるのはむずかしい．「対象」に入れ込みすぎると本来の「対象」は非常に複雑なので「道具」の有効性をうまく示すことができない．従来はそのように考えて「道具」に重きを置いた研究が多かったと思われる．しかし「対象」に入れ込まないとその「対象」で真に有効な結果を出すことはできない．

最近はさまざまな情報処理技術の浸透もあって，工学系だけでなく人文系も含めたあらゆる対象で「対象」に重きを置いた情報処理の研究が盛んになってきた．「対象」そのものの情報化を志向した，学問体系を変化させるような変化へとつながりつつある．ここではその動きを○○情報学と呼ぶことにする（○○には具体的な「対象」の名前が入る）．

一方，これまで情報処理技術と縁遠かった多くの産業分野においても，情報処理技術をうまく取り込むことでこれまでにないサービスが可能になり，業務効率化などの新たな改革が行われつつある．これらの産業改革でも，ブレイクスルーをもたらすためには本質的な分析や洞察が必要であり，学問の新たな体系化としての○○情報学へとつながる可能性がある．

本特集ではこのような新しい情報学のうちのいくつかをピックアップし，その分野のトップの研究者の方々に解説をしていただいている．どういう対象をどういう切り口で研究しているのかを説明していただき，『学』としての体系，アクティビティ，これまでの研究動向，これからの研究の方向性などについて論じている．核となる技術や『学』としての成り立ちを中心に据え，研究動向についても触れている．今回の特集では，まったく新しい領域のものから，既存領域だが体系化がなされていないものまで，さまざまなレベルのものがある．これまで名称として定着していない学問もあるが，本特集の機会に，試行的にそういう学問があるとしたらどうなるかという観点から，独断的にまとめたものもある．さまざまな領域の中で，どのような人たちがどのように考え，どのような取り組みを行い，従来の情報学がどのように活かされ，変革しているのかを見ていただきたい．

なお，本号の『道しるべ』として掲載されている『生命情報学』は，生命学と情報学が融合する学際領域であり，もともと本特集の一部として企画されたものであったが，分野がすでに成熟しており，学問領域として定着したものであるため，初学者向けの道しるべとして特集から外して掲載している点を注記したい．成熟した学問領域の展開を，本特集の他の記事と合わせて比べていただければ参考になるのではないかと思う．

最後に特集の表題について断っておきたい．末尾に情報学とつくような研究領域を集めることを意図して最初は「××情報学」という名称で企画を開始した．×は否定的でイメージが悪いということで○にして途中から「○○情報学」と改名した．×も○も仮題のつもりでいたのだが，これらに代わる適当な名称も思いつかず，また意外に「○○情報学」という名称の評判が悪くなかったため，最終的にこのような特集名になった．発音するときには「まるまるじょうほうがく」と読んでいただきたい．

この○○情報学特集がこれらの新しい分野に興味を持つ人が増えるきっかけとなることと同時に，多くの人にあらためて情報学の本質を考えていただくきっかけとなることを望む．

（平成 22 年 5 月 15 日）